横浜詩人会事務局　相模原市南区新磯野 4-6-3-205　金井雄二方
発行人　佐相憲一（会長）立川市一番町 1-45-17-203
＊郵便振替　00230-0-5574　ヨコハマシジンカイ／ http://yokohamasijinkai.web.fc2.com/

つばめ

村山精二

足柄山（金時山）の麓に位置する拙宅の周囲は、自然豊かでまことに申し分ないのだが、困ったこともある。蜂（アシナガバチ）が多いのだ。

軒下に巣を作られたことは数知れず。30年ここに住んでいるから、20回は作られたかなと思う。一度は天井裏に直径30センチはあろうかという巣があった。せっかくの労作で申し訳ないが、これは駆除させてもらった。

軒下は気を付けていないと、いつの間にか3センチほどの巣の初期が出来ている。が、それを見つけ次第すぐに叩き落してはダメである。夕方まで待つことが肝要。働き蜂が全部巣に戻り、まわりが暗くなって飛ばなくなったころを見計らって叩き落す。そして足で踏みつけて再起不能にする。それからゴミ袋に収納するのだが、その度に自分の性格がどんどん悪くなっていく気がする……。

その他、ハシボソガラスが屋根に来るのは当たり前。小鳥が窓にぶつかって死んだり、まれには生存しているものもある。夫婦らしいキジが庭先に来るようになって、もう20年は経つだろうか。ときどきケーンと啼いて、自分はいつも民話の「雉も鳴かずば撃たれまい」を思い出している。

裏の畑や隣の蜜柑畑にはイノシシの足跡。しばらく前には集落内に鹿が入ってきて騒ぎになった。それどころか丹沢の熊がやって来て、猟友会が出動する事件も起きた。まことににぎやかだ。

そんな拙宅に珍しい鳥がやってきた。ツバメである。

ツバメそのものは珍しくないが、思い返してみると、拙宅の軒下までやって来たのは初めてではないかと思う。もちろん巣を作られたことはない。そういえば隣近所にも巣はないなと思い至る。

そのツバメが軒下でホバリングして、巣に適当な場所を物色している模様。蜂の巣は困るけど、ツバメなら許容範囲かな。まったく根拠はないが、なんか、ついでに詩も連れて来てくれる気がしたし…。

拙宅に近いバス停はターミナルで、広めのバス転回場所と屋根付きの待合所がある。その屋根にツバメの巣がある。巣の下にはフン受けもあり、近くの人が掃除をしてくれているようだ。ツバメは毎年来ている。

バスを待つ間、いつもツバメの様子を眺めていて、好ましく思っていた。子どもたちが口を開けて、親はホバリングしたり巣に止まって餌を与えたりしている。そして、もう一羽の親は近くで見張りをしていて、なんともほほえましい。

その情景が思い出されて、思わず「オレには詩を持って来てくれないかな」と愚考してしまったのだ。

ところで多くの詩人たちはつばめの詩を書いているのかな。ネットで調べてみると意外と少ないようだ。わずかに立原道造の「燕の歌」がヒットしたのみ。ならば自分で書くしかないか。ん？　これが詩を持って来てくれた、ということかな。

報告

現代詩イベント2023「詩誌のはなし」

2023年6月11日14時より神奈川公会堂にて「現代詩セミナー2023　詩誌のはなし」が行われた。まず司会の服部理事、谷口理事が挨拶し、続いて開会挨拶を金井理事長より。1958年創立の横浜詩人会は先達の遺志を継承して続いている。セミナーは初回は1981年で、今回31回目に当たるとのこと。

そして第一部。歴史ある詩誌「地下水」の方喰あい子さん、個人誌「すぷん」同人誌「天国飲屋」等多彩な活動を続ける坂多瑩子さん、カルチャーセンターの講座受講者で活動を続ける「タンブルウィード」の若尾儀武さんの3名が席につき、コーディネーターの佐相会長から説明があった。パネラーの3名の話から始まり、まず方喰さんから。

方喰あい子さん

「地下水」は1959年創刊。同人10名、年4回合評会を行い、新年会、総会、ポエムギャラリーなどの活動を行ってきた。活動を紹介する中で方喰さんは代表の保高一夫さんが知恵を絞ってきた結果いまの地下水があると語った。地下水によって人との交流の経験を積むことができ、詩集を6冊も出すことができ、まさに出発点が地下水であると結び、この詩誌が方喰さんの人生にとても重要だということが伝わってきた。

坂多瑩子さん

続いて坂多さん。配布資料を無視して話しますと冒頭に宣言し、笑いを誘った。自分は詩誌という形態が好きでいろいろな詩誌に参加している。人が好きというより自分が好きな詩が集まっている場が好きだと。「ぶらんこのり」、「4B」、「天国飲屋」について語り、続いて個人誌「すぷん」の話。好きな詩人について知りたいという野望があって毎号詩人を取り上げているという。最後に横浜詩人会にはたくさん詩人がいるのでお互い利用しあって活動すればよい、という提言。人とかかわって新たな場を作る楽しさを教えてくれる話だった。

若尾儀武さん

最後に若尾さん。稲川方人さんの朝日カルチャーセンター現代詩講座の生徒が集まり2017年に8人で創刊した「タンブルウィード」は全体をくくる理念をあえて持たず、それぞれ自己表現できる詩を書く力をつけるための団体だったと思うと語ってくれた。あるとき詩人の青木由弥子さんから同人誌という場所が創作の連鎖や舞台となる場所でもあると実感したという言葉をいただき、次の号を出すのが楽しみになったとのこと。講座と同じくお互い高めあうよい場が作れているのだ

浅野言朗理事

金井雄二理事長

佐相憲一会長

谷口鳥子理事

服部剛理事

と感じた。

３人の話のあと、詩の朗読、続いて佐相会長から質問で、他者と自分の詩を同じ場に入れる同人誌と詩集とでどう違いがあるか？と。若尾さんはお互いの良い意味での影響について語り、坂多さんはプロデューサー的な視点で詩誌を作っていると語り、方喰さんは地下水とほかの詩誌に参加するときで臨み方の違いがあると語ってくれた。

その後浅野理事より「横浜詩人会詩集２０２１」巻末の「詩誌一覧」の紹介が行われ、第一部は終了。

休憩をはさみ、第二部は朗読会。

荒船健次、大鹿理恵、高細玄一、田尻英秋、田中裕子、冨田民人、中島悦子、堀内敦子、水無川渉、森川芳州の10名の方が朗読をしてくれた。前に立つ詩人の姿、声、朗読前に語られる言葉、朗読、朗読後の服部理事のコメントと、それぞれの詩を様々な要素とともに味わう贅沢な時間となった。

続いては参加者にマイクをわたして一言をということで10数名が感想をコメントしてくれた。

そして閉会の挨拶は三浦理事から。ネットでの活動がメインだった自分にとって勉強になることが多い会でしたと熱く語り、３時間にわたったセミナーは散会となった。

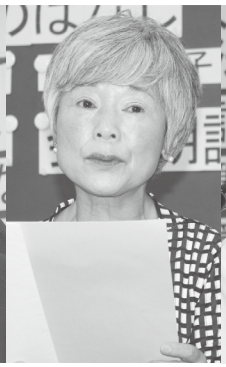
参加者（敬称略）相原京子、あがべなお、浅野言朗、荒船健次、池田高明、井嶋りゅう、磯崎寛也、今鹿仙、うめだけんさく、大鹿理恵、奥津さちよ、方喰あい子、金井雄二、川崎 毅、坂多瑩子、佐相憲一、紗野玲空、鈴木正枝、関中子、高細玄一、田尻英秋、多田陽一、立木 勲、田中裕子、谷口鳥子、鎮西貴信、冨田民人、中島悦子、野木京子、服部剛、原田もも代、保高一夫、堀内敦子、松浦成友、三浦志郎、光冨幾耶、水無川渉、森川芳州、山口真喜、山田玲子、山本聖子、若尾儀武（以上会員）、金井裕美子、川久保朝香、河口夏実、高細浩子、陶原葵、南條雄一、西村盈子、藤田信子、村野美優（以上会員外）（文・今鹿仙）

三浦志郎理事

田中裕子さん

田尻英秋さん

高細玄一さん


大鹿理恵さん

荒船健次さん

森川芳州さん

水無川渉さん

堀内敦子さん

中島悦子さん

冨田民人さん

「横浜詩人会総会・記念トーク」より

横浜詩人会の思い出と詩作

うめだけんさく

二月二十六日の総会で「横浜詩人会の思い出と詩作」ということで話をさせてもらった。とはいえそれは会の歴史の一部に過ぎないものである。私の限られた経験の中に残された一断片という事にもなるだろう。

川口敏男さんが会長であった頃、その年の総会でどなたかが「会として暦年表記を西暦年にしてはどうか」という趣旨の発言をしたことがあった。その時川口会長は即座に日本の文学では歴史上、明治文学、大正文学、昭和文学という解り易い区分がある、と言われたことがあった。英米詩の研究家でもある川口会長なら賛成かと思ったがそうではなかった。それが妙に頭に残っていた。

西暦年にした方がよいという自分の中に何故ためらいがおきるのか？　私だけではなく、例えば難波律郎さんという詩人がいる。平林敏彦さんとよき詩友で共に活動した人であるが『昭和の子ども』（一九八八年）という詩集を出している。表題となった作品を紹介してみる。

昭和の子ども
―きこえてくる　あの歌―

昭和ノ子ドモヨ　ボクタチハ
昭和元年　満三歳だったボクタチは
やがてハナ　ハト　マメ　マスで字を習った
昭和ノ子ドモヨ　ボクタチハ
寒い十一年　二月の終わり　修学旅行の伊勢参宮
雪の二十六日　その夜明け　おえらい人らが殺された
昭和ノ子ドモヨ　ボクタチハ
戦争　戦争　戦争の
昭和ノ子コドモのボクタチの　友達死んだ　たくさん死んだ
イタリア敗けて　ドイツも敗けた
日本が敗けた二十年　八月十五日　昭和ノ子ドモのボクタチは
生き残りのボクタチ
ああ生き残りのボクタチは　人それぞれにそれなりに
この列島に生きてきて　若い兵士も年老いた
昭和ノ子ドモに　戦後の子
その子の子が　長い昭和の地の果を　蟻のように歩いている
かれらはどこへ行くのだろう
地平のむこうになにがある
昭和の果になにがある？　もうボクタチには見えないが
天皇死んだら泣くだろう
昭和ノ子ドモの　ボクタチの　じぶんの歴史を思うだろう
風にはためく旗のもと　天皇の名で無になった
老若男女の人生を　思って涙を流すだろう

昨日在位六十年の式典の終り　よろよろと　式典を去るその人の
　猫背のうしろ姿の撫肩は　荒寥とした地平線であった

地平のむこうになにがある
地平のむこうは永遠だ　もう時間切れのサヨナラで
釈然とせぬまま消えてゆく　雲のむこうへ歩みいる

昭和ノ子ドモヨ　ボクタチヨ

この詩を読んでどう思うか。それは人それぞれだと思うが、昭和という時代に翻弄された世代のほろ苦さが漂う。私も『獣』四十二号（一九九三年）に「幻視の夏」という詩を書いたが心のどこかに難波さんの作品が潜在していたように思う。その詩の終連で「終わりにしたいのですが／終わりにできない時代があります／〝昭和〟は終わった／終わりにできない〝昭和〟を尾骶骨につけたまま／いびつな時代を生きている」と書かざるを得なかった苦い思いは今に続いている。

平林敏彦さんは戦後詩の目覚ましい活動を経て第一詩集『廃墟』（一九五一年）、第二詩集『種子と破片』（一九五四年）以降詩から離れていたが詩集『水辺の光　一九八七年冬』（一九八八年）をもって横浜詩人会に復帰された。以後会長としての仕事を精力的にされた後信州へ転居されたところまでを話した。平林さんは、編集にかかわる仕事、又イベント等に向けての集中力には並外れた力を発揮されたと思うが、他にエンターティメントの資質もおありで、詩とジャズのイベントでも仮装姿で登場するなど驚かされたこともあった。またご自身、横浜駅西口方面にあるＳＴスポットという施設で詩劇を数回演じるなど詩を自己のうちに閉じ込めることなく、外に向かって発信する姿勢には他を圧するものがあった。又信州に移られた後、安曇野松川村には何度か訪問させてもらったが、自宅の入り口に「青猫座」と表記され、事実青猫座公演と銘打って「在りし日の歌」をもって中原中也を演じたこともあった。このときは、大石規子さん、大貫裕司さんをお誘いして、その詩劇を観劇させてもらったことが思い出されたりしてくる。

思えば中島可一郎さんのことも忘れ難い。私が横浜詩人会に入会した時会長であったこともあるが、獣の会の同人会にもよく顔を出されていた。『獣』の代表本野多喜男。他に同人鈴木繋雄、入江元彦らは平林敏彦さんとも親交があり、かつて『詩行動』で行動を共にした仲間でもあった。戦後、中島さんは富塚漢作のペンネームで神奈川新聞に「公園ニ咲ク花」という詩を掲載した。それが機縁で平林敏彦さんとの付き合いが始まったと聞く。平林さんが神奈川新聞で紙の調達に腐心しながら新聞づくりに苦労していた時期である。

話は戻るが『獣』の本野多喜男が一九六〇年に第一詩集『遭難記』を出して以来二九年ぶりになる第二詩集『箪笥』を出版した。その詩集に跋文を書き、また『獣』三六号（一九九〇年）に「本野多喜男の詩に関するエスキス」戦後現代詩のある側面とある文を寄せてくれたりしている。詩集『箪笥』の出版社は中島さんと関わりのある勁草出版サービスセンターであった。

二〇〇〇年に第七回「先達詩人を囲む会」で中島可一郎さんが選ばれた。開催日は十二月であったか十一月の中頃であったと記憶するが中島さんより当日使用するテキストを君のところで作ってくれないかと依頼があって慌てふためいたことがあった。七十一頁に及ぶテキストになったが、項目や頁の入れ替えなどが頻繁にあって何日も我が家に通われ、版下作りの厳しさに耐えた日々が今となっては懐かしい。編集に関しては中島さんも平林さんに負けず劣らず厳しい人であった。

新入会員紹介

拝見させて頂きたく…

山口真喜

敬愛する詩人の作品から抜粋します。

「詩の好きな人もいる」

そういう人もいる
つまり、みんなではない
みんなの中の大多数ではなく、
むしろ少数派
（中略）
そういう人はたぶん、千人に
二人くらい
（中略）
詩が好きと言っても——
詩とはいったい何だろう
（後略）

「終わりと始まり」
ヴィスワヴァ・シンボルスカ

読むことと書くことを繰り返し
そこからふっと飛び出る言葉を
一つの枠の中に収める。
収めきれずに、はみ出している
想いに惑います。
もう書くなどという事は
いい加減にしたらよいのに
とは思ったりもするのですが。
人に迷惑を掛けないで、
気持ちを宥めるには、
言うより書いた方が私には合って
います。
そしてそれを詩と呼べるかどうか
はわかりません。
諦めが悪い人です。
書く人たちを拝見させて頂きたく、
迷惑を顧みずに入会に至りました。
よろしくお願いいたします。

【現代詩研究会のお知らせ】

現代詩研究会を開催いたします。

本年度より、現代詩研究会を開催することといたしました。

毎年度お一人の講師をお迎えし、横浜詩人会の会員を対象に、詩について、深く読み、深く考える勉強会を作って参りたいと思います。

本年度講師：中島悦子さん
略歴：横浜詩人会会員。2009年、『マッチ売りの偽書』でH氏賞を受賞。2015年『藁の服』で小熊秀雄賞を受賞。

第1回横浜詩人会現代詩研究会

日時：7月29日(土)13時30分
場所：横浜市瀬谷公会堂(相模鉄道本線三ツ境駅下車徒歩5分)

残席がございますので、参加を希望される方は、担当理事の浅野言朗まで、メールか電話でご連絡下さい。
asano.kotoaki@world.ocn.ne.jp
090-1462-8092

【選考委員会・委員のお知らせ】

第55回横浜詩人会賞選考委員決まる

伊藤悠子氏
大石規子氏
方喰あい子氏
鎮西貴信氏
三上透氏
谷口鳥子氏
光冨幾耶氏
（以上7名）

＊選考会は夏ごろを予定しています。

＊選考結果は10月発行の「横浜詩人会通信」328号にて発表予定。贈呈式は今のところ、11月ごろを予定しています。

＊会員の皆様には対象詩集のアンケートにご協力いただきまして、ありがとうございました。その結果をもとに、選考委員会が、候補詩集の確定から受賞詩集の選考までを行います。

◎夏の日の詩とジャズ♪♪◎

8月26日（土）13時～16時

ジャズスポット『DOLPHY』で行われる、毎年夏の恒例イベントです。 ジャズピアニスト・加藤英介氏の演奏と共に詩人たちの言葉を共有する、素敵なひと時になるでしょう。
※6月に別送した朗読申込の締切りは過ぎましたが、お問い合わせは担当の服部までご連絡下さい。
(電話：090-9009-6923 メール：gouhattori@yahoo.co.jp)
※ お客様として参加ご希望の方は申込み不要です。お誘いあわせの上、ぜひ当日会場にお越し下さい。
※ 会場のドルフィーは、ＪＲ京浜東北線・横浜市営地下鉄「桜木町駅」徒歩６分・京急「日の出町駅」徒歩３分･みなとみらい線「馬車道駅」下車　出口３「博物館口」徒歩 11 分･「みなとみらい駅」より桜木町駅経由徒歩 20 分です。（横浜市中区宮川町 2-17-4 第一西村ビル２Ｆ）
皆様の詩の言葉を、心からお待ちしています。　🎹🎹🎹 ♪♪

2023
詩画展

会期　9月18日(月)～ 9月24日(日)
11時～18時　（初日13時より　最終日16時まで）
会場　**画廊 楽Ⅱ**　横浜市中区翁町1-3 小原ビル
（JR関内駅 南口より徒歩3分）

詩人と画家が同一のテーマで制作し､相違を楽しむ展覧会。今年のテーマは 旅です。
皆さま、ぜひ会場へお越し下さい！　担当 谷口鳥子 ✉kerotani@pony.ocn.ne.jp

【会計からの報告とお願い】

横浜詩人会の会計にいつもご協力くださり、ありがとうございます。

皆様から続々と年会費のお振込みをいただき、大変ありがたい限りです。お振込みがまだの会員様は、どうぞよろしくお願いいたします。

また、今年も横浜詩人会賞基金にご寄付をいただきたく、払込取扱票を同封いたしました。一口千円とし、何口でも結構です。どうぞよろしくお願いいたします。早々にご寄付くださった会員様へは同封しておりません。厚く御礼申し上げます。

（会計担当　野木京子）

【会員募集中】
横浜詩人会に入会ご希望の方、
ご紹介の方はご連絡ください。
詳細は担当理事まで。
〒215-0018
川崎市麻生区王禅寺東 5-23-10
原田もも代
momoyo-t@f8.dion.ne.jp

【理事会報告】

第３回理事会
３月11日／仲町台地区センター
・総会（２月26日開催済み）後の確認。全体にいい集まりになった（詳細は通信３２６号記事）。
・現代詩セミナー２０２３（６月11日）の準備進行。神奈川公会堂に決定。チラシ案の検討と決定。役割分担も決める。
・現代詩研究会の第１回を７月29日に決定し、講師を中島悦子会員が快諾。
・通信３２６号校正。同封物確認。
・横浜詩人会賞選考委員打診のための候補を確認。
・夏の日の詩とジャズ、詩画展について今年の予定を検討開始。
・入会承認１名。会員総数は１１３名に戻り、ここまでを新しい会員名簿に反映する。
・会計報告を確認し、昨年度会費未納者への対応を個々に検討。今年度の理事経費補助を決定。

第４回理事会
４月23日／杉田地区センター
・現代詩セミナー２０２３の諸準備進行。パネラー及び朗読者への対応、参加者を増やす方策、当日配布物などを決める。
・現代詩研究会（７月29日）の会場を瀬谷公会堂に決定し、通信以外に個別に参加者を募ることなどを確認。
・第55回横浜詩人会賞選考委員７名決定（通信３２７号に発表）。
・夏の日の詩とジャズ開催を８月26日（土）に決定し、先方のスケジュール上、当初予定とは別のピアニストに依頼。
・詩画展２０２３開催を９月18～24日に決定。
・通信ホームページ報告を確認。
・会計報告を確認。

《会員消息》（順不同・敬称略）

【逝去】
平田好輝（次号に追悼記事）
森口祥子（次号に追悼記事）

【名簿訂正】
中島悦子（メールアドレス）
ー（エル）→1（イチ）
保坂融（住所表記）
新白川→新石川（正）

【名簿変更】
金井雄二（メールアドレス変更）
[redacted]
磯崎寛也
（携帯電話番号とメールアドレス変更）
[redacted]

【住所変更】
真宮治郎
[redacted]

【新聞記事】
「神奈川新聞」文化時評　現代詩
（毎月第1木曜日）光冨幾耶

【会員の詩書と参加詩誌など】

【詩集】
大石規子『十一行』（花梨社）
徳弘康代『i g i 彙戯』（金雀枝舎）
磯崎寛也『キメラ／鮫鯨』（芸術新聞社）
鎮西貴信『おーい　老い』（土曜美術社出版販売）

【詩誌など】
「アル」67号　阿部はるみ　西村富枝
「イリプス Ⅲ」2・3号　広瀬弓
「ウミツバメ」9号　浅野言朗
井嶋りゅう　今鹿仙
「ERA」20号　草野早苗　方喰あい子
荻悦子
「オオカミ」41号　坂井信夫
梅津弘子　日野零　冨田民人
関中子　佐々有爾　小桜ちゅぴこ
池田髙明　佐相憲一　光冨幾耶
塩路明子
「小熊秀雄協会会報」26・27・28号
佐相憲一
「回游」77号　富永たか子　関中子
原田もも代
「交野が原」94号　福田拓也
野木京子　草野早苗　佐川亜紀
「カナリア」5号　服部剛
「紙で会うポエトリー２０２３」
坂多瑩子　谷口鳥子
「CROSS ROAD」21号　中上哲夫
「京浜詩派」242号　高畑玄一　洲史
荒波剛　梅津弘子
「現代詩２０２３」坂多瑩子
佐川亜紀　伊藤悠子　中村不二夫
「ここから」16号　荒船健次
「木立ち」144号　中島悦子
「山脈」29号　三上透　冨田民人
「詩界通信」102号　方喰あい子
佐川亜紀　佐相憲一　井上摩耶
「Σ詩ぐ魔」5号　佐相憲一
「詩人会議」4・5・6月号
佐相憲一　いだ・むつつぎ
「詩素」14号　坂多瑩子
「詩と思想」4・5・6月号
中村不二夫　うめだけんさく
原田もも代　方喰あい子
鎮西貴信　堀内敦子　進藤友佳
阿部はるみ　荻悦子
いだ・むつつぎ　柴田秀子
「space」168・169号　草野早苗
木島章　中上哲夫
「ターニングポイント」4号
鎮西貴信
「Down Beat」21号　金井雄二
柴田千晶　谷口鳥子　徳弘康代
中島悦子　今鹿仙
「ちいさな森」27号　関中子
「地下水」247号　村上きょうこ
草野早苗　新沢まや　林柚維
石原妙子　鎮西貴信　森川芳州
方喰あい子　保高一夫
「ちぎれ曇」3号　新沢まや
菅野眞砂
「天国飲屋」3号　坂多瑩子
鈴木正枝
「波」22号　村山精一
「日本現代詩人会報」170号
池田髙明　磯崎寛也　佐相憲一
山本聖子
「日本未来派」244号　林柚維
「独合点」151号　金井雄二
「びーぐる」59号（終刊号）
坂多瑩子
「風化」58・59号　長田典子　広瀬弓
「伏流水通信」89号　うめだけんさく
「PO」189号　佐川亜紀　佐相憲一
「横浜詩誌交流会会報」79号
うめだけんさく　田村くみこ
高細玄一　石原妙子　石川敦
鎮西貴信　佐藤裕　菅野眞砂
「流」58号　山本聖子
「竜骨」121号　奥津さちよ　小林妙子
「るなりあ」50号　鈴木正枝

【通信担当よりお願い】
☆「会員の詩書と参加詩誌など」欄に掲載ご希望の方は通信担当までお知らせください。詩集・詩誌などをお送りくださる他、詩集は「表紙と奥付」、参加詩誌は「表紙と目次、発表作品の頁」をコピーしてご郵送頂くか、スキャンもしくは写真に撮ってデータをメールでお送り頂くだけでも結構です。
郵送先：〒251-0052
藤沢市藤沢1-11-6　光冨幾耶（みつとみいくや）
E-mail: mitsupoetry@gmail.com

【編集後記】
横浜詩人会会員の参加の詩誌は多彩で、歴史ある誌から新生の誌まで、ますますの活躍を期待しています。
同人誌については詩人の活動の場として重要なものと考えております。
また、総会の記念トークのうめだけんさくさんの貴重なお話を通信に掲載させていただきました。横浜詩人会の伝統とこれからの会について皆様と考えていきたいです。（光冨）

詩人会創立　1958年10月25日
通信創刊　1961年2月10日
会員数　111名